

# 明治村

## だより

1997 Autumn

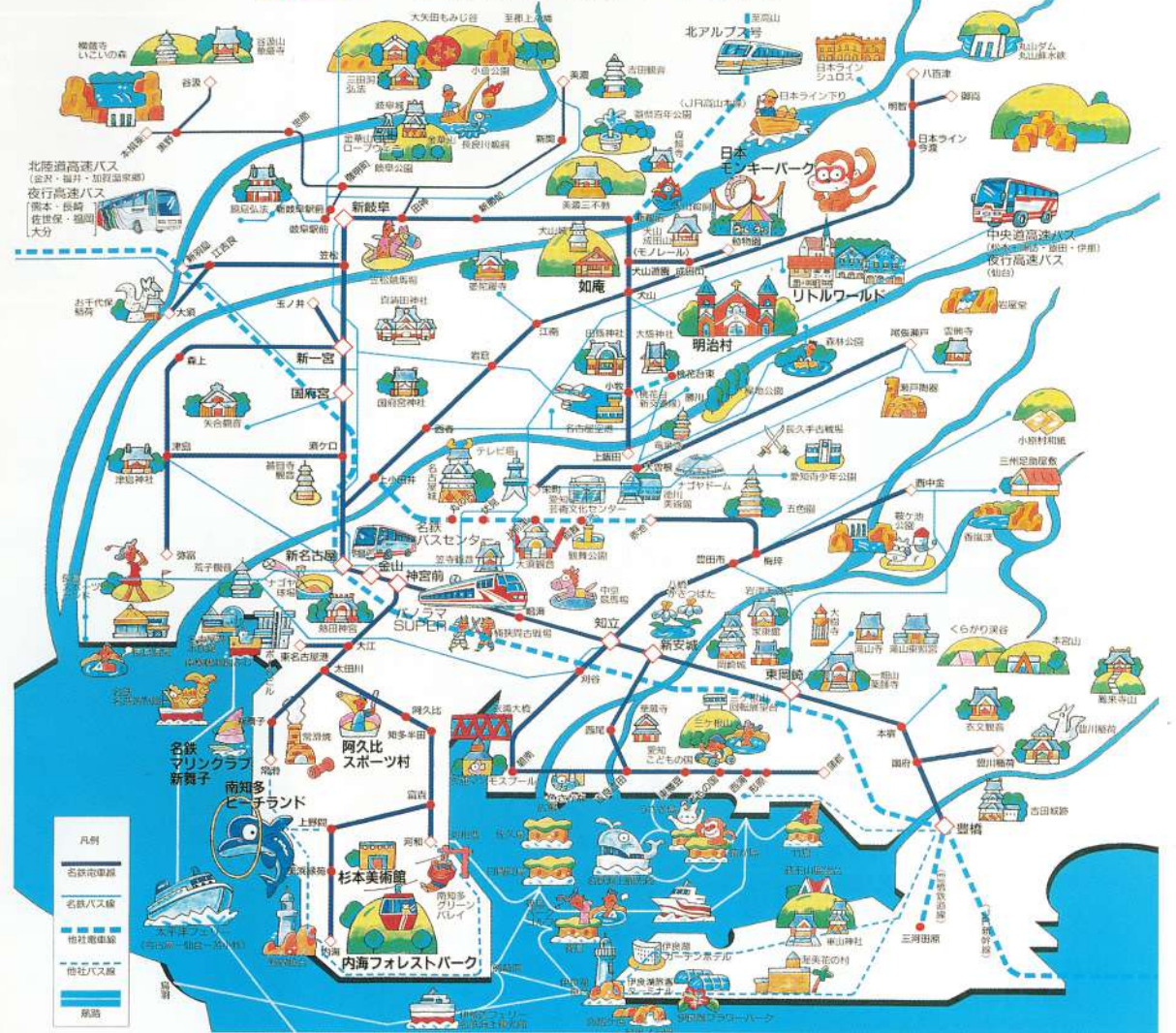


秋号  
Vol.9

平成九年十月七日発行(季刊)

明治村だより 第九号

### 名鉄沿線ご案内



目次	
呉服座改修完成記念特別展	
明治の大衆文化 芝居絵が語る粹と美	2
芝居絵とその魅力 服部幸雄	4
計	9
呉服座保存修理工事竣工 西尾雅敏	10
明治村秋催事	14
表紙 豊原国画大當劇場寿語録	

『明治村だより』	
第十号(平成十年初春)発行のお知らせ	
発行時期 平成十年一月(予定)	
申込方法 『明治村だより』第十号ご希望の旨及びご住所・お名前を明記の上、送料一九〇円分の切手とともに封書にてお申し込み下さい。	

平成九年十月七日発行	
『明治村だより』第九号(平成九年秋)	
発行 博物館明治村	
愛知県大山市大字内山一丁目	
電話(〇五六八)六七〇三二四 千四八四	
東京事務所	
東京都千代田区紀尾井町三二二三	
文藝春秋ビル新館七階	
電話(〇三三三)三三三三五六六 千一〇二	
製作 求龍堂	

# 呉服座改修完成記念特別展

## 明治の大衆文化

# 芝居絵が語る粋と美

明治時代は西欧文明の影響を多大に受けた時代ですが、新しい文化が一般の人々の生活をただちに一変させたわけではなく、それまで長年培われてきた江戸時代のさまざまなスタイルを踏襲していました。

人々の最大の娯楽であった芝居は時代の趨勢に変化しながらも依然として絶えることなく受け継がれ、芝居をより一層楽しむための芝居絵も引き続き描かれました。

明治の芝居絵の特徴は描く題材に新時代の珍しい風物を積極的に取り入れたことがまずあげられます。洋服を着用した役者や洋風建築、時計、サーカスなどを盛り込んだ芝居絵に、文明開化の息吹が感じられます。また画材としては輸入絵の具が普及したことによりアニン紅や紫といった派手な色がよく用いられました。さらに構図としては役者のプロマイド写真を貼り付けた役者絵や、より写実的な方向をめざして近代的画法を加味したものなど、それまでには見られなかった絵が登場しました。

今回の展示は、この時代に描かれたさまざまな芝居絵を通して当時の人々の美意識を探るものです。以下展示構成と出品資料の一部をご紹介します。

### 一、劇場の様相 芝居小屋から近代劇場へ

明治になって演劇活動が大きく変貌を遂げると共に劇場の形態も変わりつつありました。明治十一年、東京新富座が改築されて芝居小屋の象徴であった正面の櫓が廃止され現在のような、舞台と観客席が対面する額縁式の舞台がはじめて登場しました。また洋風の外観をもつ劇場が建てられ始め、ガスや電気の照明が導入され、棧敷席を椅子席に改めるなど内部の洋風化が進みました。明治四十四年には完全な西洋式の帝国劇場が竣工しました。

図1 「新富座本普請落成初興行看客群集図」

梅堂国政画 明治十一年

この年開業した東京京橋区新富町にあった新富座の内部を描いたもので、舞台にはじめてガス灯がつけられ、夜間興行も可能となりました。新富座の歴史は古く江戸三座の一つ守田座がその前身で、明治前期を代表する劇場でした。

### 二、絵に見る芝居

#### 1 上方絵

上方絵とは京阪の地で版行された浮世絵をさし、その殆どが役者絵です。江戸時代寛政年間（十八世紀）からはじまり、文化文政期（十九世紀）頃が最も盛んに描かれた時期で、明治二十年代になると終わりを迎えます。

上方絵の特色は写実的な描写で、加えて滑稽味が感じられ緻密な線の彫りがきわだっています。色彩も濃い色を多用しやや重たい雰囲気もちまいます。

絵師は幕末から明治にかけて、国芳の流れをくむ芳滝や国貞の流れをくむ広貞らが活躍して多くの作品を遺しました。

た。

図2 「五人男容氣白浪」 一養斎芳滝画 明治二年

大阪・筑後芝居で上演。

稲瀬川勢揃いの場面で、捕手に追われた弁天小僧はじめ盗賊五人組がそれぞれ名乗りを上げ見得をしている有名な情景を描いています。

#### 2 東京の芝居絵

上方絵と比較しますと東京で版行された芝居絵は、江戸の町人文化の流れを受け継ぎ、軽妙洒脱な描写を特色とします。役者絵では写実性よりも民衆の美意識を反映してやや美化して描かれています。色彩も概して落ち着いた配色を主としています。新しい時代の流れに敏感で、当時珍しい写真を取り入れたり構図にも工夫をこらしています。絵師は歌川派の豊原国周、その弟子の楊洲周延、国芳の流れをくむ芳幾らが活躍しました。

図3 「俳優写真鏡 沢村田之助」 落合芳幾画 明治三年

当時の銀板写真に似せて描いた役者絵で、描かれた三代沢村田之助は守田座の立女形として活躍しました。

#### 3 富山売薬版画

富山売薬版画とは、富山の売薬りが全国に家庭常備薬を行銷するおり、顧客におまけとして配った絵のことです。紙風船のおまけはよく知られていると思いますが、以前は色刷りの版画を配ったものです。この風習は江戸時代から明治時代にかけて盛んに行われたようで、芝居絵・名所絵・武者絵・相撲絵などいろいろな種類があり、顧客の好みに応じて配りました。なかでも人気のある芝居の一幕を描い



図1 「新富座本普請落成初興行看客群集図」



図2 「五人男容氣白浪」



図3 「俳優写真鏡 沢村田之助」



図4 「鬼一法眼館之段」

た芝居絵が一番喜ばれました。娯楽が少なくなると地方においては時たま掛けられる村芝居を見ることが楽しみであった時代、そうした記憶を甦らせる色鮮やかな浮世絵は、ささやかなおまけとはいえ何よりの土産であったでしょう。これらの絵の作者は多くは地元の名無名の絵師ですが、その名が知られているのは富山藩お抱え絵師である松浦宗美や尾竹国一（日本画家尾竹竹坡・国観兄弟の長兄）などがあげられます。

明治後半になると手刷り木版画は影をひそめその後は色刷り石版画が大量生産されるようになって昭和初期頃まで配られました。

売薬業と共に発展した売薬版画はその特殊な成立のためあまり知られていませんが、版画史上はもとより生活に根ざした民俗資料としても注目できると考えられます。

図4 「鬼一法眼館之段」 尾竹国一画 明治中期

「義経記」に題材をとった「鬼一法眼三略巻」を描いたもので、明治特有の色使いですが、周囲を額縁仕立てとした華麗な作品です。

● 11月24日(休)まで三重県庁舎階特別展示室  
● 芝居絵・写真等約70点の資料を展示。





# 訃



明治村館長村松貞次郎が平成九年八月二十九日満七十三歳にて永眠いたしました。

平成三年六月、三代目館長として就任し、当館の発展に努めてまいりました。

村松館長は大正十三年静岡に生まれ、昭和二十年旧制第八高等学校卒業後、東京大学第二工学部建築学科、同大学院を経て、昭和二十八年東京大学生産技術研究所に奉職、同三十六年助教授、四十九年教授に就任して近代建築史・建築技術史の研究を続けるとともに、多くの後進を育成しました。昭和六十年東京大学を定年退官して名誉教授となり、その後平成七年まで法政大学工学部教授を務めました。東京大学退官の年、財団法人明治村の理事となり、平成元年、日本建築の近代化過程を技術史の観点から研究、近代建築史を書き改め、再評価した業績により第十五回明治村賞を受賞されました。

先代館長関野克（財団法人明治村顧問）の直弟子という関係で三代目館長として推挽されてより、

貴重な歴史的建造物を保存するという明治村創設の意志を受け継いできました。さらに明治村の内容を一層充実させ、各方面での明治文化研究の成果を盛り込み、その統合・啓蒙・普及の基地という新しい博物館構想を打ち立てました。

昨年より展示建造物の内部充実に尽力し、明治時代を甦らせ体験できる場として建物を再利用するということに着目したのもその一つです。

また我が国の近代化を支えた産業・交通・土木関係の建造物についても文化財的保存措置をとるという「近代化遺産」調査を提唱し、全国の失われようとしている貴重な建造物の救済にも尽力しました。明治村の展示建造物にもこれに該当するものが多くあり、それらに新しい意義付けをいたしました。

本年は、十月十日に公開する予定の重要文化財呉服座の改修工事に力を注ぎ、これが最後の仕事となりました。

なお、葬儀・告別式は、九月三日、東京港区の高野山東京別院においてしめやかに執り行われました。

主な著作は専門分野では「日本建築技術史」、「日本建築家山脈」、「日本近代建築の歴史」、「近代和風建築」（共著）、「近代日本建築学発達史」（共著）など多数あり、また大工道具や職人の歴史にも造詣が深く、「大工道具の歴史」、「道具曼荼羅 全三巻」（共著）、「鍛冶の旅」など多数著しています。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

# 呉服座保存修理工事竣工

西尾雅敏  
博物館明治村・建造物担当部長

チョーン、チョーン、チョーンと幕が開く。「東西東西、本日は、かくも賑々しくご来場賜り、座主、演者一同衷心より御礼申し上げます。さて」と柿落としの口上が響く。

(平成七年十二月から十九ヶ月に及んだ呉服座の保存修理工事が今年七月終わりました。)改装なつた芝居小屋は冬眠から覚めた大きな若熊のように、ゆつたりと、しかも美しく光り輝いている。柿洪が塗られて渋い赤色の腰板や格子窓、黒光りする壁、白壁が目立つ正面の妻壁には柿洪塗りの太鼓櫓、そして今回の修理の大半が費やされた屋根には赤茶けた杉皮。厚みがあつて軽やかで、柔らかな屋根が地方の芝居小屋のおおらかさと素朴さを感じさせる。木戸口を開けて土間に入ると、新しい薄緑の匂いが微かにする。腰高窓から杖敷を覗くと緩い傾斜の平土間の先に広い舞台が見え、床板が真新しいせいか、杖敷に比べて舞台が明るい。晴れがましい役者の口上が聞こえてきそうである。

(この呉服座を修理しなければならなくなつたきっかけは屋根の波打ち状況でした。)約二十六メ

ートルの長さには達する大屋根の棟、その棟が数箇所で突きあがり、その間が微妙に下がっていたのである。大きな屋根面も緩く凹んだりしている。(この状態を直すのが修理当初の主題でありました。)

長い工事の間には冬も夏もあり、雪も梅雨も台風も予想される。屋根の工事を円滑に進めるためには素屋根という覆いを掛けねばならない。従来、古建築修理の際作られる素屋根は木材で作られることが多かった。先年行われた彦根城の大修理でも天守閣を覆っていた素屋根は電柱より太くて長い木材をふんだんに組み合わせて作られていた。余談になるが、それ自体素晴らしい構造の器であつた。しかし、明治村では少し事情が異なる。明治村には六十余の保存建造物があつて、毎年大なり小なりどこかの建物を修理しているから、素屋根もその場限りで廃棄することもなく、出来れば次へ次へと移し変えながら活用できればありがたいのである。木材の素屋根はやはり材料を切り刻みながら組まれるから、転用が危うい。そこで鉄骨の素屋根が検討され、大きな鉄工場のような

素屋根が作られることとなつた。間口十四メートル余り、棟の高さ九メートル余り、奥行き二十六メートルに達する呉服座は芝居小屋としてはさほど大きくないけれど、建物としては大きく、それを覆う素屋根は一段と大きいものとなつた。鉄板とプラスチック板を交互に張つた大屋根の中に囲い込まれた呉服座の屋根は、妙なことだが今までの屋根より明るく見えた。室内に取り込まれたような錯覚の元で建物を見るからなのであろう。

いよいよ、工事の本番に入る。屋根瓦が全て降ろされ、瓦を止めていた葺土も降ろされる。乾燥しきつて堅くなつた土を、ある時には砕きながらの作業で、もうもうたる砂塵が風に乗って前の苑路に吹き流される。常に公開しながら修理せねばならない野外博物館の如何ともしがたい事情で、風の具合を見ながら、見学者の動向を見ながら、朝夕に重点をおいて作業が進んだ。瓦と土を降ろして軽くなつた屋根は、野地板葺きのなんとなく粗末な小屋に見える。野地板を見渡すとやはり波打っている。凹んだ所、突きあがつた場所がそこそこあつて、小屋組み自体歪んでいたことが一目瞭然である。

屋根の解体に入る前から、不陸の原因について色々と考えが巡らされた。多くの推論が出されて議論された末、大方の意見として落ち着いたのが、この小屋組みの強さでは瓦屋根は重過ぎるという結論であつた。この屋根を支えている小屋組みには和風の小屋組みと洋風の物が混用されている。和風の小屋は概ね次のようになる。右の壁と

左の壁の間に太い梁が水平に渡され、その梁から垂直に何本もの束が立てられて、その上に何本かの母屋と中央一本の棟木が、更に垂木が乗せられて最後に野地板が敷かれる。呉服座では平土間の広い部分だけ洋風の小屋が掛けられていて、洋風の場合は水平の梁の中央に太い真束が一本立てられ、梁の両端から真束の頂上へ向けて合掌と呼ばれるこれも太い木材が組まれている。三角形は崩れ難いという常識的な原則に従つて作られたのが洋風の小屋組みである。呉服座の場合、和風の小屋、洋風の小屋が混用されているのだが、いずれにしても小屋組みの間隔が通例より広く、そのため垂木から野地板、屋根瓦等を支える母屋の長さが長くなるのだが、そのくせさほど太くないのである。母屋が太いのはあまり形の良い物とも言えないから、むやみに太い材を使わないのだが、それにしても一本の母屋が支えている範囲が広すぎて、たわむのもうなずける話である。軽い屋根ならたわむこともない。瓦葺ではなく、杉皮葺の屋根、これなら軽いから屋根がたわむこともないはず。移築当初から耳に入っていたことであるが、古老の語るところによれば昔は杉皮の屋根であつたらしい。しかし、確たる証拠は何も無く、移築直前の姿のまま復原して今日の状態となつたのである。移築から四半世紀、やはり母屋がその重みに耐えきれなくなつたと言ふことか。今一度、移築の頃の池田での写真を見ると、やはり棟が同じ様に波打っている。現場に証拠はなくとも、二度にわたって時間が証明してくれていた。この小屋



素屋根の前には、屋根工事見学のステージを組んだ



床板もまばゆい舞台



新築なり柿落としを待つ呉服座

組みは瓦用には作られていなかったのだ。

屋根葺材を杉皮に戻すとしても、一度歪んでしまった小屋組みをなだらかに組み直さねばならない。なんとなく粗末な板屋根にみえる野地板を剥がし、垂木を外し、母屋を上げて、一本一本高さ調整を施す作業が続けられた。傍目には大きく凹んでいた野地板の落ち込みの部分でも、実際に母屋の高さで調整しようとするので、二三センチのことであって、人間の目は如何に物の姿の不自然さを鋭く見抜けるものかと感心する。

調整が終わると、今一つ大きな改造が待っていた。小屋組みの補強である。この呉服座の修理の年の始めに、あの悲惨な阪神大震災が発生し、神戸市内にあった数多くの木造文化財が被害を受けた。それぞれに状況が異なるのだが、総じて木造建造物の構造の弱さが指摘された。呉服座の修理開始に当たっても、構造解析が実施されて、太鼓槽のある正面妻壁の通りが足元で弱い、とか、舞台上に天井が無い前後に繋がりが無く横揺れに弱いなどの結果がでた。正面の妻壁下が弱いのは、柱しか並んでいないから納得出来る。舞台の上は色々な幕を引き上げるため、屋根裏へ懐深く何も造らないのが芝居小屋の通例で、これも弱くって当たり前といえば当たり前。太い竹を縦横に組んだ葡萄棚の上で水平に何本もの鉄筋の筋交いを渡して解決することとなった。正面の弱さは、既存の柱に鉄骨の柱を添わせて全体を若干強くした。他の部分の強さとのバランスがあって、強くしすぎて困るのである。壊れない程度に揺れる

ことも必要なのである。

小屋組みが出来、補強も終えて、いよいよ杉皮葺に入る。山に育った杉の皮を生木のままで表面の皮を剥ぎ取った物が杉皮である。屋根の仕様によって、様々な大きさに用意される。今回の場合は幅三十三センチ前後、長さ六十四センチに切り揃えた杉皮を用意した。杉皮の量を述べるのは難しい。日頃余り馴染みがないからで、ダンブカーのようなトラックにざっと五台分と言えば、分かるだろう。とにかく多い。

軒先では二十枚ぐらい重なって、十二センチぐらいの厚みになっている。軒から棟に向かって六センチずつずらしながら、重ね上げて行く。口いっぱいに含んだ釘を舌先で口元へ一本一本出しながら、右手は口と膝元の杉皮の間を往復、一回毎に金槌が振り下ろされ杉皮が固定されてゆく。声を掛けたいが、職人さんは返事が出来ない。止めつけが一区切りつくと、次に張ってゆく杉皮の拵えをする。それぞれの職業には特有の道具があるものだが、この職種にも面白い刃物がある。「檜皮包丁びんぼう」という。大型の菜切り包丁の先端も刃先にしたようなもので、向こうへ押して切り削るといった感じである。杉皮の重なる部分を平滑にするための刃物である。杉皮五段毎ぐらいの間隔で割竹を挟んで全体を締め付けながら棟まで葺き上がってゆくのである。

屋根の上で建物の姿が次第に変わっていく頃、小屋の中でもいくつかの工事が進められた。舞台の床が新しくなったことや廻りの壁が塗り替えら

れたことは目にも鮮やかで良く分かるのだが、趣味が洪いたために後々も余り気付かれぬところが多い。二階棧敷の手摺は黒漆塗りである。ただ、丸い笠木は木肌の凹凸をそのまま残し、柱や地覆は鯨肌のように漆の微妙な凹凸を生かした「叩き仕上げ」で、且つ全体に艶消しなので大変洪い。それでも、広い小屋の中で唯一素肌でない部分ということになる。天井の二尺角くらいに区切られた格天井の紙も新しい越前和紙になって、一段と清々しい小屋となった。

昔、杉皮だった屋根を瓦屋根に変えたのには理由があったであろう。杉皮が普通に使われる地域(呉服座の故郷は大阪の池田)では、瓦屋根に出来るのは豪華な印だったかもしれない。燃えやすい材料から燃えない材料へ変えるというのはもともと現実的な要求であったとも思う。いま、我々はその逆の道を辿って昔の姿を復原した。ドレンチャームという屋根一面に水を撒く消火設備を備えてまで、あえて燃えやすい杉皮に戻したことは理由がある。

過去から現代まで続く道の、それぞれの場所の塚をきちんと残して置くことが、未来の子供たちの財産になるのだから。その子達がそれぞれの将来をどのように作るかと考える時のヒントとなるのだから。それが文化財保存の最大の目的と信じている。

土間から上にあがって、平土間の茶子道をかぶりつきまで歩んで一番前の柵席に腰を降ろし、あらためて小屋の中を見回す。一階席三百四十人

程、二階席百七十人程、併せて五百人を超す見物客が入れる小屋が、このように小さい空間とは思議である。また、日本の芝居小屋とはこのように飾り気の少ないものか。窮屈そうであっても構わず、飾り気が少ないのには意味があるように思う。舞台で演じられる芝居だけが主役で、その他は全てそのための便宜的な装置であって、盛り上がって欲しいのだからゆったりと落ち着いてもらっても困るし、廻りが目立ってもいけないのだ。現代人の感覚とは少し違う気がする。見上げると舞台正面の垂れ幕に呉服座の紋がある。五つのお多福の絵が丸く描かれ真ん中に「座」とある。「呉服」を「くれは」と読まず「ごふく」と読んで、五つの福にすりかえた。関西人の頭の柔らかさと未来への明るい向き合い方を見る。



### 明治村料理セミナー

帝国ホテル中央玄関 12:00～  
※予約が必要

- ハイカラ料理を味わう  
明治時代のベストセラー「食道楽」の中から子爵邸で行われた食道楽会のメニューを再現します。  
10月26日(日)・11月9日(日) 2,000円
- 天長節夜会を味わう  
明治26年11月3日鹿鳴館で行われた「天長節夜会」のメニューを再現します。  
11月3日(祝) 3,000円

### 日曜講座 「明治建築種あかし」

好評の日曜講座。明治建築を通じて、自然の中で建物がどのように人々の生活を支えてきたかわかりやすくお話しする短い講座です。将来、新しい家を立てる時に役立つようなお話です。  
第2・4日曜 11:15～11:45  
第四高等学校物理化学教室  
10月のテーマ 「呉服座新装」  
11月のテーマ 「燈台」

### 文豪の家から手紙を出そう

鵜外、漱石が住んでいた家から手紙を出しませんか?文豪気分で書いた手紙を宇治山田郵便局のポストへ投函すれば、風景入りの消印で宛先へ届きます。  
期間中毎日 森鷗外・夏目漱石住宅



### 品川硝子ショップ オープン



工部省品川硝子製造所にガラス製品の専門ショップがオープンしました。グラスやフラワーベースなど色とりどりのガラス製品が店内いっぱいにはなっています。アクセサリやレトロな切り硝子が人気です。是非ご来店ください。

### 明治村秋催事

# いま、明治の劇 が始まる

## 明治村 秋の大祭典

9月13日(土)～11月24日(休)



- 日本庭園で野点を楽しもう  
通常非公開の日本庭園で風流な茶の湯をお楽しみください。  
10月・11月の日曜・祝日 日本庭園
- 樹木染め教室  
土曜 千早赤阪小学校講堂 500円～
- 機織り教室  
日曜 鉄道寮新橋工場・機械館 無料
- 明治村写真コンテスト入賞作品展  
11月30日(日)まで 東山梨郡役所2階

呉服座に芝居がかかると、廻りの屋台がにわかに活気づく。人力車が行き交い、貴婦人や矢絢姿の女学生、書生さん達が集まってきた。村のあちらこちらでは大道芸も始まり、遠くでは御輿かつぎのお囃子が聞こえてくる。……賑やかに明治村・秋の大祭典の始まりです。

### 呉服座公演

この秋、改修工事を終え 新装なる呉服座に歓声と活気もどってきます。

### 「柿落とし公演」

10月10日(祝) 舞踊 岐阜芸妓組合  
名妓連

### 「特別公演」

10月19日(日) 歌舞伎 小原歌舞伎保存会  
26日(日) 歌舞伎 若芽会  
11月2日(日) 歌舞伎 塩沢歌舞伎  
3日(祝) 歌舞伎 白子歌舞伎  
9日(日) 歌舞伎 小原歌舞伎保存会

### 明治なんでも大運動会

パン食い競走、自転車競走、綱引きなど楽しく懐かしい明治の運動会を開催します。家族や友達と一緒にご参加ください。  
土曜・日曜・祝日  
第四高等学校武道場無声堂前  
※参加者当日募集(300円)

### 大道芸人がやってくる

チンドン屋とともに、ガマの油売り、南京玉すだれなどが村内で練り広げられます。  
10月10日(祝)～12日(日)  
11月1日(土)～3日(祝)、  
22日(土)～24日(休) 村内各所

### 明治屋台大集合

おなじみの明治時代の屋台が今度は呉服座前に集合します。芝居の呼び込みとあいまってあの頃の活気が甦ります。  
土曜・日曜・祝日 呉服座前

### 秋まつり お神輿を担ごう

一般参加の皆さんと一緒に神輿を担いで練り歩きます。大うちわや笛の音がお祭り気分を盛り上げます。  
11月1日(土)～3日(祝)  
(10:30～・12:00～・13:30～・15:00～)  
レンガ通り周辺

### 開化好男女大行進

一般参加の皆さんが明治時代の警官や書生、車引き、貴婦人などに扮して賑やかにパレードします。  
土曜・日曜・祝日 11:00～ 14:00～  
正門～呉服座  
※参加者募集中(無料)